ISSN 0911-5587

楷

岡山大学附属図書館報

OKAYAMA UNIVERSITY
LIBRARY BULLETIN

NO. 14

1991
NOVEMBER

新時代に向けての図書館の機能充実

― 館長就任にあたって ―

萬　成　　勲

定兼前館長の後を受けて5月1日附属図書館長に就任してから5カ月が経過しました。現代は高度情報化時代であり、また国際化の時代であると言われています。この事は図書館についてはまさに文字どおりの感がいたし任務の重大さを痛感しています。現在の大学図書館の置かれている状況をご紹介して学内各位のご理解を賜り、ご指示、ご協力をいただき、今後の図書館機能の強化充実に努めて行きたいと考えています。

申すまでもなく図書館は大学の研究教育を支える重要な基盤の一つであり、各種情報資料の充実、整備、提供が重要であると考えています。また、新中央館建設をはじめとする従来からの懸案の実現ならびに新しい時代に即応した図書館の充実に向けて努力して行きたいと考えています。どうか学内各位のご指導ご支援を心よりお願いする次第です。

(1)　図書館建物の新築について

現在の中央図書館は昭和46年に増築された当時のままで、延べ面積は7,413㎡であり、その後の本学の急速な発展により必要面積にたいする充足率は、51％程度にまで低下してきています。現在、書庫は満杯となり図書資料の配架が十分には出来ない状態となっています。従って書架の一部を集密型のものとしたり、閲覧スペースを削ってそこに書架を置いたり、あるいは書庫の窓際の位置で本来書架を置くべきでないようなところにまで新しく書架を配置する計画を検討したりして急場を凌いでいるのが現状です。利用者の皆さんには非常にご迷惑をおかけしているとともに図書館側の配架作業にも難渋しています。幸い、佐藤元館長時代に「新中央図書館構想マスタープラン」が策定されており、さらに定兼前館長時代には「施設設定委員会津島北キャンパス整備計画検討専門委員会」、「新中央

図書館建設企画委員会」等の議を経て建物増築に関する具体的で詳細な建設計画案が策定されており、この線に沿った建物増築が早期に実現することを念願しています。建物に関連しては、本年6月の国立大学図書館協議会総会において「図書館建築基準に関する特別委員会」報告があり、学術情報システムの普及進展等により大学図書館の機能が大きく変化してきている現状に鑑み、基準面積の見直しが強く求められています。

(2) 図書館の当面の課題

文献検索などでのオンライン化の整備と相俟って、いわゆる所在情報へのアクセスは比較的容易になってきています。今後、この種の文献検索の整備と相俟って1次情報そのもののより効果的な入手という問題があります。

現在サービス向上の一環として夜間開館の時間延長を行っています。これは法学部及び経済学部第二部等からの強いご希望に沿う形で発足したもので、利用者も順調に増えて定着した感があります。さらに来年度から予定される週40時間勤務制への移行下でのサービスの確保等の問題もあります。基本的にはサービス低下にならないように心掛け、その対策の一つとして図書館案内の機械化（図書館利用インフォメーションシステム）を推進して行きたいと考えています。また最近の傾向の一つとして、生涯学習への支援あるいは大学の行う公開講座との関連等で、市民の大学図書館利用の希望が増加傾向にあります。

(3) ニューメディア関係

最近の図書館の動向として、学術情報システムへの取組みやCD-ROMをはじめとするニューメディア等の導入が上げられます。図書館と総合情報処理センターの共同提供により、昨年11月から同センターの端末からも岡大OPAC（Online Public Access Catalogオンライン利用者目録）の利用が可能となっており、さらに学内各方面のご理解により図書館専用電子計算機システムの中央装置の強化とその端末の増設が昨年度に実現しております。また、中央館ならびに鹿田分館にはCD-ROMが順次導入されています。今後、この種の電子化情報媒体による情報資料の導入整備には利用者のご意見を伺いながら積極的に取り組んで行きたいと思っています。

(4) 予算の有効活用について

図書館予算については、本学の急速な発展ならびに図書、雑誌、資料等の値上がりを考えると、実質的には漸減傾向にあり、それらの整備に困難な状態が続いています。幸い、定兼前館長時代に学生用図書購入費に関連して学内措置費の増額が認められ、これにより一般図書、参考図書、継続雑誌ならびに全学共用図書等について計画性をもって整備できるようになりました。しかし、まだ十分とは言い難い状況であり、必要な資料の点検や見直し、あるいは重複をなくすこと等により、予算の有効活用を目指しているところです。また一方では、大学図書館として特徴のある各種の情報資源の充実・整備が必要です。

(5) 池田家文庫のマイクロ化事業

池田家文庫は、寛永9年（1632年）から明治維新期までの約240年にわたる貴重な藩政史料等で、平成2年度より資料保存ならびに資料のより有効な活用促進の立場からマイクロ化事業が進められています。そして、全体を4期に分け、その第1期分が11月中旬に頒布される運びとなりました。それに伴い昭和45年刊行の『池田家文庫総目録』を改訂した『改訂増補池田家文庫マイクロ版史料目録』が順次出版されることになりました。今後、池田家文庫全般にわたる完備した目録の作成に向けての増補改訂作業という非常に重要で困難な作業が続くことになります。

（まんなり・いさお　附属図書館長）

池田家文庫藩政史料のマイクロフィルムが完成

岩　元　忠　幸

『楷』12号でお知らせいたしました通り本学は、池田家文庫藩政史料（古文書・記録類）約6万点を、丸善株式会社、富士写真フィルム株式会社の協力を得て、平成2年8月から3カ年の計画でマイクロ化する事業を進めておりましたが、この度、その計画の内の第1期分が完成しました。

このマイクロ化事業では、『マイクロフィルムの作成』と『池田家文庫マイクロ版史料目録の作成』とが行われておりますが、史料の保存状態や分野ごとの史料の数量を勘案して、全体を4期に分けて進めてきたもので、史料目録の方も出来上がりました。

これにより、丸善株式会社では、第1期分を分野別に広く国の内外に頒布されることになりました。

本学では、今後この成果品によって、ユーザの要望に応えていくことにいたしております。この成果品は、「自動検索仕様」になっており、ユーザの手元において瞬時に画面に写し出せるほか、印刷物としても瞬時にプリントアウトして利用することができます。附属図書館では、ユーザから利用の申し込みがあれば、画像あるいは印刷物として提供するサービスを行うことになっております。

今回のマイクロフィルムの完成により、主に江戸時代の当初から廃藩置県のあった明治初期頃までの幕藩体制の第1期分の情報が世界の各地に向けて発信されることになるわけですが、研究者の方々にとっては、池田家文庫の利用機会の拡大が図られ、海外では、歴史的視点を踏まえた日本理解が深まり、一方池田家文庫の原史料の保存対策にもなることが期待されています。

なお、この度、この機会に『池田家文庫総目録』（昭和45年刊発行）を改訂増補し、マイクロフィルム用の目録を作成する事業を、本学、丸善、富士写真フィルムで協力し、スタートさせることになりました。この『改訂増補池田家文庫マイクロ版史料目録』は、約6万点にも及ぶ大量の史料群に、ユーザが従来にもましてより的確に、より迅速にアクセスすることができるよう『池田家文庫総目録』の精度を高め、更に詳しい情報を追加することを目的として計画されたものです。今回第1期分の完成に際して、総記及び国事維新の分野について改訂増補された目録を出版して、ご批判を仰ぐことになりました。

すなわち、改訂増補版では年次情報や内容細目といった書誌的な事項が追加され、一件文書を明細化し、体系的な編纂物や一件文書を原秩序へ復元するというような改善が図られています。そして、今回は冊子体の史料目録として出版されますが、将来は、データベースやCD-ROM等の電子化された史料目録の出版も可能にするため、目録データの電子化や標準化といった工夫も凝らされています。

マイクロ化事業は平成4年度まで、また、改訂増補してマイクロフィルム用の史料目録を作成する事業は、平成6年までかかる息の長い事業です。池田家文庫等特殊文庫委員会及びその下にある教官、職員のワーキンググループの地道な努力が続きます。文部省を初め本学事務局並びに関係者の皆様には、引き続き暖かいご援助とご指導をお願いし、この機会にこれまでのご厚情に厚くお礼を申し上げる次第であります。

（いわもと・ただゆき　附属図書館事務部長）

利用者指導を考える

― 図書館サービスを充実させるために ―

山　中　康　行

はじめに

「利用者指導？」ざっくばらんに言えば、「HOW TO 図書館」です。4月に新入生オリエンテーションで、図書館概要のスライドを上映しましたが、それは利用者指導のほんの一部でしかありません。情報社会と呼ばれる今日ですが、図書館が情報の蓄積の場であることは誰も異論のないところであると思います。その図書館（員？）を上手に使いこなすノウハウを、コンパクトにご理解いただくというのが（図書館）利用指導の目的です。もちろん利用者が図書館（員）に求めることも様々であり、図書館（員）の関わり合い方にも、知識・経験・理解度にも差があり現段階では充分に満足していただいているとは思っておりません。学術情報の洪水、ニューメディアの出現にも、利用者に信頼され、親しまれ、お役にたてる図書館を目指しています。大学を取り巻いて大きく変わりつつある諸々の情勢のもとで、附属図書館が実施している利用者指導と新しく始めようとしていることを述べようと思います。

1　激変しつつある図書館の役割

資料の収集・整理・保管・貸出が主な仕事であった（知識獲得型）図書館が、現在では情報を収集する一方で、他の図書館等と活発な情報を交換する、情報センター（情報獲得型図書館）としての認識がなされ、図書館自身が情報の発生源（基地）となりつつあります。岡山藩人物情報データベース「諸職交替」及び、現在岡山大学附属図書館が精力的に推進しています「池田家文庫マイクロ化事業」もその一例です。

（学外に広がる利用者層）

これまでの本学あるいは学外の主として大学に所属している学生、教官、研究者を対象とした図書館サービスは、生涯学習や大学の公開に伴う一般への公開、国際交流の活発化に付随した留学生の増大によって、従来とは異なる質・レベルが要求されるようになっています。そのため多種多様な要求を持った利用者に、適切な情報サービスを提供出来るように配慮された利用者指導がますます必要になっています。

（記録媒体が多様化する情報源）

これまでの図書館は、「図書・雑誌」に代表される印刷媒体の資料とマイクロ形態の資料を主として収集してきましたが、現在はビデオ、カセットブック、CD-ROM等のニューメディア資料の収集も多くなりつつあります。

（求める資料の探し方の変化）

従来のカード目録から端末の画像で表示される、図書・雑誌所蔵検索システム、業者提供のDBや大学等の所蔵するDBのON- LINE検索、CD-ROM検索の出現と、使用できるメディアが多様化しています。

（外部所蔵情報の入手方法のスピード化）

外部機関で所蔵している資料の現物貸借、複写物の入手は郵便を利用していますが、これもファクシミリによる申し込み、送信という方式が活用されるようになりました。

ＩＬＬシステム（研究者への原文献の提供を迅速化し、関連業務の効率化を目的とした図書館間相互貸借）が本稼働すれば端末からの簡単な操作で申込みが可能となります。また電子ファイリング・システムで隔地間での複写物を入手するテストも試みられています。

2　なぜ利用者指導が必要なのか

利用者指導とは図書館の提供する資料とサービスの利用方法にかんするインストラクションを意味します。そして、図書館の利用方法を通じて利用者に情報処理能力を修得してもらうことを目的としています。図書館の情報提供機能が多様化し、提供する情報量も増大化していますので、利用者の方でも適切な指導を求めてきています。従って、人(利用者)と資料(情報)とを結びつけるために、指導という形で利用者支援をすることは、図書館の最も大切な業務の一つになっています。

3　利用指導の実際

大学図書館は近年大きく変貌しつつあります。また、公共図書館・高等学校の図書室とも大きな違いがあります。このため新入生にだけではなく、在籍者に対しても利用者指導が必要になっています。

今年度の利用（者）案内の呼びかけは、4月9日、新入生に対して新しく作成したスライドを上映して、「中央図書館利用案内オリエンテーション」を行い、画像と音響で図書館の概要を説明しました。希望者には日を改めて図書館での実地オリエンテーションを呼びかけ、希望に応じて延べ4日間利用指導を行いました。ここでは、カード目録の利用方法、OPACの検索方法、CD-ROMの検索方法等の指導を行いました。

5月には在学生に上級生向けの利用者指導（卒論を控えたグループ、研究室グループなどの希望者や教官の要請のもとに授業の一環として組み込まれたもの）を行い、基礎的情報検索指導及び主題別情報検索手段の指導等を行いました。

4　利用者案内のシステム化

以上のような図書館を取り巻く情勢のもとで、当館では、利用者に提供する新たな利用案内システムとして、OULIS（Okayama University Library Information System）を検討中です。この詳細は今後館内で具体化していくことになりますが、現段階での概略を説明します。

OULIS は小型パーソナルワークステーションまたはパーソナルコンピュータを利用して図書館利用に関する情報を誰でも手軽にディスプレイ上で検索し、利用方法や必要とする情報を具体的に知ることができるシステムです。情報提供の内容は、画像・音響・文字情報で構成されます。メニュー形式を採用し、メッセージ等をディスプレイに表示します。同時に音声による説明のナレーションをスピーカーから流します。必要があればディスプレイ上の文字情報を印刷物として提供できるサービスもできるようにしたいと考えています。当面の案内メニューは、①図書館利用方法、②所蔵検索、③配架場所、④機器操作等です。このシステムを導入することにより、定型的・単純・反復的な業務を軽減し、個別的・複雑・高度なレファレンスサービスの一層の充実を図ろうとしています。図書館利用者指導もアメニティー(余裕、ゆとり)効果を生かし、図書館の施設・設備の利用案内から利用指導へと変貌を遂げつつあります。

おわりに

図書館は現在のサービス（閲覧、貸出、文献複写、レファレンス等）に代わって、情報提供機能（情報サービス、資料検索サービス）を中心とする、ネットワーク機能としての窓口サービスを要求されるようになると予測されます。図書館員は次々と出現するニューメディア、限りなく出版される参考資料など大量な情報から必要な情報を選択する技術に精通することが重要となり、これまで以上の研鑽が必要です。図書館員の努力を充分に生かすためにも、一人でも多くの利用者が図書館（員）を利用されることを期待します。

(やまなか・やすゆき附属図書館情報サービス課長)

図書館利用指導教育

―文献探索法ガイダンスを演習に取り入れて―

石田米子

1　図書館利用方法をどう指導するか

私が指導する文学部東洋史履修コースの学生は、3年次の後半にそれぞれの卒業論文のテーマを決めるが、その関係の文献情報を集めて本格的に取り組み始めるのは4年次になってからである。それ以前の1、2、3年次に東洋史演習でレポートを書かせてはいるが卒論を書く4年次生になった時に、岡大図書館の機能を十分利用でき、文献情報検索が自由にでき、オンラインによる新しい検索法を私に教えてくれる学生もいる一方で、書庫の中を歩いてたまたま見つけた本と指導教官が指定・紹介した文献しか見ない、文献検索の方法をほとんど身につけていない学生もいる。卒論を書く段階になってから初めてレファレンスカウンターに飛びこみ、手とり足とりで教えてもらっている学生も少なくないのではないかと思う。

図書館利用方法・文献情報検索方法を、どの段階でどのように学生に習得させるかについては、演習の中でいろいろ試みてきたこともあるが、オンライン検索サービスの範囲が拡大していくにつれ、私自身が図書館の機能を使いこなせていないことを自覚し、自ら学びつつ図書館のスタッフとタイアップして学生指導に当たる必要性を感じていた。

2　図書館ガイダンスに演習単位で参加して

本年の4月、図書館で新入生オリエンテーションが行われ大変好評だったと聞いた。ついで5月、上級生向け図書館ガイダンスが実施されるというので、今年度の私の演習単位で早速申し込んだ。専門の分野の文献情報検索方法のオリエンテーションをやってくださるということだったので、「東洋史関係文献情報の検索方法」ということでお願いした。参加したのは、私と演習の履修者17、8人で、ほとんどが2年次生と3年次生、ほかに研究生（留学生）、聴講生も参加した。時間は1コマ分。2グループに分かれて各2人の図書館スタッフの方についてガイダンスをしていただいた。

非常にありがたかったのは、図書館の方で予め『主な東洋史関係文献情報の検索方法』という資料を作ってくださっていたことである。この4月にできた『中央図書館利用の手引き　教官用』（改訂版）では最新の利用方法の全容がわかり、コピー版冊子『検索の手引き』には岡大図書館の図書・雑誌の検索方法の説明があるが、専門分野の研究に際して必要な文献情報の岡大図書館での検索方法となると、これまでは参考調査係のスタッフの方に聞くほかなかった。それが、今回、資料としてわかりやすく整理されプリントされていたのである。

もうひとつ、今回のガイダンスの収穫は、文献目録の実物の所在を目で確かめ、ある事項に関する検索をしてみたこと、オンライン検索について全員がキーをたたいて自分が探してみたい文献情報を呼び出してみたことであろう。スタッフの方がつききりで実地に指導してくださった。私を含めコンピュータの操作をしたことのない歴史学の学生にとって、1回では習得できないとしても、オンライン検索はまず慣れることが必要である。一人で行って積極的に質問し指導を受ければよいといっても、なかなか足の重い人もいるし、図書館でもひとりひとり対応するのは手

のかかることだから、図書館サイドのガイダンスと授業・論文指導を組み合わせる方法は今後ももっと具体的に研究しつつ、演習に取り入れて行けるとよいと思った。

3　東洋史関係文献情報の検索方法について

実を言うと、つい7、8年前、岡大図書館がカード検索からオンライン検索に変わる頃は、自分はもう定年退職しているだろうから「逃げきれる」などと冗談を言っていた。ところが2年前から岡大図書館もオンライン検索に変わり、東洋史関係の文献情報のデータベース化も進んで、他分野に比べればかなりおくれているとはいえ、情報検索とりわけ最新情報の検索はかなり便利になった。

今回、図書館参考調査係で作成してくださった『主な東洋史関係文献情報の検索方法』は、口頭でのガイダンスの際に補足された部分もある試作の資料だが、研究・教育に携わる側も協力してこのような分野別の手引きを作成し、改訂を積み重ねて行けば、岡大図書館が現在持っている機能を、研究者も学生ももっと有効に生かすことができるのではないかと思う。歴史学は、結局は一次資料が決め手であるが、二次資料を使いこなせなければ研究史料としての一次資料に到達するのも偶然に頼らざるをえないことになる。

冊子体二次資料の利用法については、雑誌論文と図書に分け、まず雑誌論文の探し方のガイダンスをしてもらった。国会図書館編集の『雑誌記事索引―人文・社会編―』、京大人文研附属東洋学文献センター編集の『東洋学文献類目』と『東洋史研究』巻末文献目録、『史学雑誌』巻末文献目録（東洋史編）で、東洋史関係の論文を探す方法、それぞれの利点と問題点、データベース化の現状などを説明してもらい、実際に検索をしてみるという方法で実習した。『雑誌記事索引』のデータベースが国会図書館内部では利用できても、全国つまり岡大ではまだ利用できない、『東洋学文献類目』は81年からデータベース化されており、今年度接続申請中であるなど、情報サービスの現状も掌握できた。学生は、東洋史関係の論文を探すには、基本的にまず何をどう利用すべきであり、また利用できるのかがわかったと思う。雑誌の所在を探す方法についても『学術雑誌総合目録』と『中国文雑誌・新聞総合目録』の見方を教わり、すぐ利用できそうである。

図書は『国会図書館蔵書目録』を冊子体（1985まで）で利用する方法とJ-BISCの利用方法についてガイダンスを受けた。

東洋史ないしはアジア現代史の文献情報のデータベースを利用する方法として、CD-ROMの利用方法のうち、上記J-BISCの利用方法と、HIASK（朝日新聞記事索引）の利用方法を、実際にキーをそれぞれがたたきながら教えてもらった。東洋史関係では『東洋学文献類目』のデータベースCHINA 3のオンライン検索が岡大でできるかどうかが私の大きな関心事だったが、この時はまだ申請中だったものが、今はできるようになっている。この利用方法については参考調査係で今研究してくださっており、検索を依頼しながらそれを研究対象にしていただいている。先日筑波大学のUTOPIAと接続したことを『ライブラリー・リフレッシュ』で見て参考調査係に伺ったら、歴史学ではほとんど利用する意味がないようだった。自分で納得の行く方法で文献を探すには、文献情報調査の専門スタッフとの協力がいよいよ必要になってきているように思える。

岡大図書館のオンライン目録については、ほとんどの学生と実を言えば私は、この日初めて検索をした。というのも、現状ではカード検索の方が比重がはるかに大きいからだが図書館利用のこんな基本的なことを今までなおざりにしてきたことを恥じた次第である。有益で楽しいガイダンスであった。

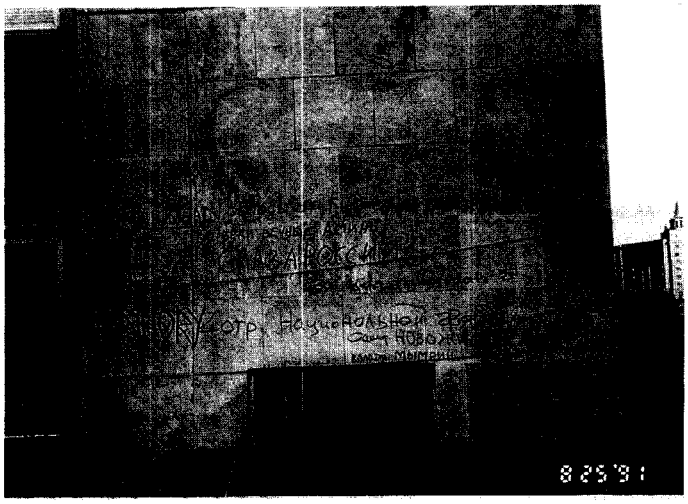
（いしだ・よねこ　文学部教授）

―ロシア史家の見た モスクワのクーデター

保　田　孝　一

今年は私の人生でも、かつてない様々な経験をした年だった。３月29日赤坂御所で天皇皇后両陛下、皇太子殿下を前に日露交流史について２時間にわたる御進講をした。４月19日には長崎市のロシア人墓地でロシア正教会のピティリム府主教と一緒にゴルバチョフ大統領夫妻を迎え握手するという栄に浴した。５月に長い闘病生活の後に弟秀夫が他界したそして６月末には国際交流基金の援助をえて訪ソし、サンクトペテルブルク（レニングラード）の海軍史料館で、北方領土についてロシア皇帝ニコライ一世が日本帰属を認めた文書（プチャーチン提督宛ての追加訓令）を発見し、日ソ両国でこの10月４日に同時発表し、話題になった。この間８月19日にはモスクワでクーデターに出会い、ソ連共産党の解体というロシア史上まれに見る大事件を目の当たりに見た。クーデターの話から始めよう。

モスクワでのクーデターの日、８月19日朝東京からの電話でゴルバチョフ大統領が失脚したと知らされた。日本やアメリカのマスコミは大騒ぎだそうだ。モスクワにいる私はこれについて何も知らなかった。1964年にフルシチョフ首相が失脚した時もクリミアで休暇中だった。同じようにクリミアで休暇中のゴルバチョフも同じようにやられたのかと思った。念のために同じホテルにいるロシア人に質問したが何も知らないという。しかしその１時間後にものすごい轟音が聞こえてきた。窓の下を見ると20才位の若者が運転する戦車が列を連ねてホテルの下の道路をドンスコイ修道院の方向へ向かっていた。モスクワで天安門事件のような事件がと考えると胸くそが悪くなったがどうしようもない。いつものようにホテルから地下鉄でレーニン図書館へ行った。この図書館からクレムリンが見える



クーデター直後のモスクワ　その１
「主よ、永遠に我々をソ連共産党より守り給え。ロシアに栄光あれ。」
―ロシア共和国最高会議（エリツィン派の拠点）の建物の落書。

赤の広場やクレムリンへの入口には戦車や装甲車が配備されていた。しかし図書館は何事もなかったように正常に運営されているのでロシア海軍の雑誌モルスコイ・ズヴォルニク（1856年）を読み、必要箇所のコピーを依頼した。午後7時頃ホテルに帰ると、ロシア人の友人に電話をする。ようやく通じた。ゴルバチョフ大統領のブレインの一人であるかれにも何も情報はないがソ連の民主化もこれでおしまいかも知れないという。だがかれが逮捕されていないので一安心した。レニングラードの友人にも電話が通じた。レニングラードは全く平静で市内に戦車などは一台も配置されていないという。ただ夜には絶対、外出しないように注意された。

夜9時からモスクワテレビ第一放送でニュースを見る。その後で大統領代行になったヤナーエフ氏らのプレス・センターでの内外の記者団とのインタビューが放送された。インタビューを始めるに当たってヤナーエフ氏はゴルバチョフ大統領が健康上の理由で職務の執行が不可能になったので、大統領代行になり、ソ連では今日、政治的、経済的危機にあるので、非常事態委員会を設置した、これはソ連邦の憲法に基づく合法的な行為だと力説した。

ヤナーエフ大統領代行を中心にパヴロフソ連邦首相ら6人の非常事態委員会のメンバーが、各国の記者の質問に答えた。クーデターを起こした連中がこういうインタビューをやるというのもソ連では画期的な話だ。辛辣な質問が多かった。なかでも、ヤナーエフ氏に「あなたの健康は大丈夫か」、という皮肉たっぷりの質問、「ゴルバチョフ氏の生命の安全は保障されているか」、「このクーデターは1917年（革命）か1964年クーデター（フルシチョフ失脚）に匹敵するか」、という質問もあった。

壇上の非常事態委員会のメンバーの自信のなさは、非常に目立った。ホテルのある掃除婦は、ゴルバチョフの改革にはあきあきしたが、非常事態委員会のメンバーはゴルバチョフ以上の悪人で、いい事は何も期待できないといった。そして外国のジャーナリストと比較して何と醜悪な顔をしているかと笑う。一般民衆が外国人にこれほど驚くほどはっきり物を言うようになったのは、ペレストロイカとグラスノスチの成果なのであろう。その掃除婦はソ連でも高学歴化が進み、文化水準が高くなっているので、スターリン時代に逆戻りする事はありえないと断言していた。

クーデターの翌日はホテルにこもっていたが、三日目からはレーニン図書館で予定の仕事をこなした。しかし、この頃はまだ、このクーデターがソ連共産党の解体につながる歴史的大事件であるとは思いもしなかった。そして歴史家としてこれまでの研究を再検討することを余儀なくされるとも予想しなかった。

クーデター直後のモスクワ　その2
レーニンの銅像だけは倒されなかった。

クーデター直後のモスクワ　その3
「皆さん我々に食物と煙草を援助してください。パンはあるから必要ありません。」
—クーデターに抵抗した若者たちの立て看板。

私がロシア語を学び始めたのが昭和23年だから、もう40年以上、ロシア語の文献を読んでいることになる。始めた動機には、英語とロシア語を使えれば将来、生活に困ることはないだろうという計算があったが、敗戦直後の社会的混乱のなかで、社会主義に対する強い憧れがあった事は事実である。

東大大学院を終了して、岡山大学へ赴任したのは昭和33年だった。そして社会主義に対する夢と希望を持ってソ連に初めて留学できたのは昭和41年のことだ。スターリン批判を行い、全世界に衝撃を与えたフルシチョフ首相が失脚した直後の事だった。この時期にモスクワのルムンバ記念諸国民友好大学とモスクワ大学の学生寮で1年4カ月間暮らしながら、自分の目でソ連社会主義の実態を見詰めてきた。その結論として物価が安く、生活が安定しているなど、社会主義のよい面があるが、計画経済の国とは考えられない無計画性と後進性が目についた。よく見て、資本主義と比較して、プラスとマイナスが半々だから血を流して革命を行ってまでこういう社会を建設する必要はないという結論になった。

こうしてソ連に留学して、保守化して帰国するとまもなくあの大学紛争の時代が始まった。この時期に、革命の国ソ連に留学して、一体何を学んで来たのかと学生たちに詰問されながら、ソ連はなぜかくも後進的なのか考えていた。その結果が拙著『ロシア革命とミール共同体』1971年、の出版だった。ロシアの後進性の原点は、ロシア資本主義、革命、社会主義建設の時代を通して、西欧社会では資本主義の成立期に解体してしまった農村共同体が、根強く残り、大きな歴史的役割を果たしたという点にあるということだ。ロシアでは農民の私的土地所有と私的経営が育ちにくい条件があったという意味だ。こういう結論は、当時の学界、思想の世界では保守的な立場に属していた。この本の執筆に際し、岡山大学附属図書館とモスクワのレーニン図書館との国際図書貸借協定の恩恵を十二分に受けたものだった。この協定に従って、レーニン図書館から帝政ロシア末期の国会の速記録十数万頁の現物を借り出し、岡山大学で自分の手でコピーを作成した。この速記録が拙著の基本史料になった。

この時から二十数年たった。この間に十数回、憑かれるようにソ連の史料館に一次史料を読みに行った。最初の留学で社会主義にはやや失望したが、ロシア人の心には強く惹き付けられ、本物の研究を進めるためには、現地で一次史料を読むことが不可欠と確信したからである。史料を読んでノートをとる。戦後の学生時代に戻ったようだった。学問の基礎は筆写である。それは今も昔も同じであることがよく分かった。その結果、昭和60年に日本人として初めて一次史料に基づく本格的なロシア史研究書『ニコライ二世の日記』朝日新聞社と『ニコライ二世と改革の挫折』木鐸社を出版する事ができた。『日記』は『週刊朝日』に連載したことでもあり、多くの読者をえたが、『挫折』の方はさっぱり読まれなかった。しかしペレストロイカの進行のなかで、ロシア革命と社会主義に対する批判が強まり、ニコライ二世とかれの時代の再評価が始まると、にわかに拙著がソ連で注目され始めた。ロシア革命以前の帝政ロシアでは、日露両国は今我々が考えるよりはるかに友好的であったという私の思想が、日ソ友好を進めるために大衆を教育するためにソ連で役立つというのである。拙著『ニコライ二世の日記』がレニングラードの日本学者によって露訳されており、ソ連の有力雑誌に掲載し、本にする予定という。そして拙著を台本にしてシナリオをつくり、日露交流史の記録映画をつくる話が進んでいるのである。だが1929年生まれの小生には、20世紀を動かしたマルクス・レーニン主義がソ連で風化し、ソ連共産党が解体状態にあるというのはやはり寂しい。

（やすだ・こういち　文学部教授）

館報・概要・リフレッシュ

―図書館広報考―

矢　野　光　雄

1　はじめに

本誌から急遽原稿執筆を依頼されたことがあった。予定していた原稿が入手できなくなったためのピンチヒッターであった。原稿を出したあとで、本誌の読者のことを思った。同時に、館報発行の意義について考えざるをえなかった。一体、館報は何のためにあるのだろうかと。

本誌「楷」が大きく変わったのはNo 9からであろう。デザインが一新され、テーマが掲げられて特集記事が掲載されるようになった。各々の号が誰を対象としているかがはっきりした。現在、岡大図書館の広報誌は三誌ある。その一つは前述の館報「楷」である。二つ目は「岡山大学附属図書館概要」である。そして三つ目は、岡山大学附属図書館ニュースレター「ライブラリー・リフレッシュ」である。この三誌を例に、ここで図書館の広報について考えてみることとする。

2　館報について

図書館のみならず企業にしろ団体にしろ、広報誌は一体何のために発行するのか、誰に向かって何を伝えようとするのかを明確にしておく必要があるように思う。私は、館報は図書館の機関誌であると考えている。

いうまでもなく大学図書館は、大学の研究教育活動の支援機関として位置づけられているし、その活動に学術情報の側面から貢献しようとするものであるから、図書館が自らの情報提供サービスの中身を学生や研究者に紹介しＰＲすることはきわめて当然であろう。それをどのような形で行うかは、各大学図書館の編集企画次第である。

私がいま所属している東北大の図書館にも国公私の各大学図書館からかなりの数の館報が送られて来ている。その記事の内容も、発行頻度も実にさまざまである。各誌の発行目的あるいは編集方針が大学によって異なっているからであるが、掲載されている記事内容から大きく分けると、①図書館資料の利用案内を主とするもの、②内外の図書館の動向を主とするもの、③図書館が抱えている課題を主とするもの、④あるいはこれら全てを取り扱っているもの等に分けることができる。　岡大の「楷」は③に属するものと言いうるであろう。毎号特集とすることで、課題解決のため、研究者や大学管理者層に向け、理解と協力を求めようとする意図がよく分かる。館報を機関誌と位置づけるか、利用案内誌とするかは迷うところであるが、館報の性格をはっきりさせて掲載記事の充実を図るべきであろう。そのような視点から見て、「楷」には新鮮な魅力を感じる。

3　図書館概要について

「附属図書館概要」あるいは「要覧」などの名で発行されている印刷物で、ほとんどの大学図書館が年１回あるいは２年に１回程度の刊行頻度で発行している。内容は、その図書館の沿革、組織機構、施設の紹介、業務内容、所蔵資料、各種統計、規程等の案内が主である。この種のものを作成するとき、われわれはどのような考えに立って編集したらよいかがここでの課題である。

まず第一に発行の目的である。私は、「概要」は、その図書館が当該年度に行った事業や活動の総記録であって、企業のそれに例え

れば、いわば決算書のようなものではないかと思っている。従って、年度当初の事業計画が計画通り遂行できたかどうか、できなかったとすればその原因はどこにあるか、それに対する対策をどうすべきなのか、このようなことを判断するための資料でなければならないように思うのである。もしそうだとすれば「概要」の主たる読者は、図書館の管理と運営に携わる人とか管理運営に影響を及ぼす立場にある人々であることを意識する必要があるだろう。

『岡山大学附属図書館概要1991』と他のいくつかの『概要』を比べて異なっている項目が2カ所ある。一つは、「整備・充実計画」欄である。これを眺めていると、過去において何をやってきたかの大要がわかる。そして最後の欄には、今後の課題が示されていて、次年度以降への新規事業の企画や改善計画の立案を容易にしている。もう一つは「特色あるサービス」欄である。わずか1頁であるが岡大図書館のサービスの姿勢が伺われる。

4　ニュースレターについて

この種のものを発行している大学図書館は比較的少ない。いわゆる一種のチラシである。広報活動を効果的に行うためにはタイミングが必要である。年3～4回刊の館報や年1回刊の概要では、ホットな情報をすばやく流すには不向きであろう。その点、岡大図書館の「ライブラリー・リフレッシュ」は、手作りながら有効に機能していると言えるのではないだろうか。

「リフレッシュ」の各号を見ると、その最大の特色は、一つの号につき一つの記事であることにある。1枚もののリーフレットであるから、見出しが一つで、その事柄だけの叙述は読者にとっては大変見やすく、受け入れやすい。またもう一つの特色は、テーマが一つであるだけに、時には学生向き、あるいは図書館職員向け、またある時には研究者向けと自由自在に振り分けて編集されていることである。電子掲示板が設備されるまでの間、このような形で図書館の利用者や関係者に最新情報を伝達することは、図書館をより身近に感じさせ、図書館依存者を増加させることになるものと思われる。

東北大図書館においても、図書館広報委員会を発足させ、これまでの館報および年次報告に加え、新たに速報誌の発行を開始した。東北大の速報誌は、図書館組織や規模等を勘案して、学内図書館職員および部局図書室職員を対象とした業務情報誌として考えられている。

5　おわりに

図書館というところは、図書館の業務に携わっている私達が理解しているほどには、利用者にも、また図書館以外の管理者層にも理解されていないように思えてならない。何故だろうか。図書館の必要性については誰もが強調するのであるが、いざ図書館のかかえている問題にぶつかると、必要性を唱える人々もその問題解決への熱意が薄れてしまうように感じられるのは私一人であろうか。図書館のもつ問題の大部分は、いわゆる金と人との問題に起因するからであろう。しかし、金も人も、図書館の機能充実のためには必要不可欠なものであるのだから、それが何故必要で不可決なものなのか、具体的に説明し、実行し、かつ改善策を示さなければならないのではないだろうか。そのためにも、われわれはより一層、明快で分かりやすい論理をもって広報活動を展開する時期に来ているように思うのである。図書館は最終的には利用者のためのものである。しかし、利用者のものにするためには、図書館を改善し得る力を持っているのは誰かを見極めることが大切である。図書館の広報は、そのことを忘れてはならないように思うのである。

（やの・てるお　東北大学附属図書館事務部長）

「マイクロ出版」について

―第1期頒布活動の開始に際して―

岡　本　昌　也

第1期の終了は、同時に出版・頒布活動の始動を意味しています。我々が撮影したフィルムのコピーが複製フィルムとして、広く内外の研究者の手元に届けることが可能になったのです。今まで、幕藩体制史研究分野では第1級の資料として内外の多くの研究者が岡山大学に出向き、閲覧また時には該当資料を撮影していた収集形態が、今後複製フィルムを採用した所においては、各々の場でいながらにしてその史料を即座に活用することができるようになる訳です。ある学者の言葉を借りるならば、「研究の進め方が根本的に変わる、画期的な出来事！」だそうです。今回はこのプロジェクトでは「池田家文庫マイクロ版集成」とよばれている、「マイクロ出版」の特徴について述べさせていただきます。

情報の記録と伝達―それは人間のあくなき渇望であり、その思いは農耕時代には「石」「木」が主役でその後「紙」「フィルム」「メモリーテープ」また近年の技術革新により「光ディスク」等の多彩な情報メディアで実現してきました。それらの数々のメディアはその時代に生きる人間はもとより後世の人々に多く情報を語り続けています。その中で代表的なメディアとして歴史、実績とも他を圧しているのが「紙」で、書籍、書類、書状等として有効な情報記録媒体として活躍しています。その結果、紙のボリュームが余りにも多いためエコロジーが叫ばれている現在、森林資源保護の立場からペーパーのリサイクル運動が始まりました。そのように多く消費される使用分野の中で、出版分野の比率がOA用紙と並んで大きいことはいうまでもありません。しかし万能と思われる出版メディアとしての「ペーパー出版」にも大きな泣き所があります。それをリカバリーするのがマイクロ出版に課せられた命題です。

ペーパーメディアと比較しての大きな利点は、①「大量頁の少量部数」の出版に適している：池田家文庫マイクロ版集成は400万頁で、出版・配布見込み数はジャンル別販売を含めMAX 100箇所といわれています。②保管・保存に関する数々の優位性がある：コンパクトで長寿命が期待できるマイクロフィルムは、保管スペースの節減、整理の容易化、搬送時の軽減化、資料の延命化等の効果が期待できます。③検索と利用形態の多様性に富んでいる：マイクロ出版には、目録が付いています。そこに記載されている該当史料のフィルムアドレスをリーダープリンターの操作パネルにキーインすると即座に該当史料がスクリーン上に投影され、また該当箇所を瞬時にコピーアウトできます。なおマシン本体に画像処理機能が装備されているためFAXにて遠隔地に流すことも可能で光ディスクに変換するシステムも既に実用化されています。以上のように「マイクロ出版」には「ペーパー出版」では考えられない大きな利点があります。

最後に「池田家文庫プロジェクト」は、かけがえのない資料の保存と情報公開に多大な貢献をする事業です。我々センターに関わるメンバー一同、大きな節目である第1期を迎えた今、もう一度原点に戻り事業の完遂に向けて全叡知・全力を傾けて積極的にとりくんでゆく所存です。

（おかもと・まさや　プロジェクトリーダー）

マスカット

'91新入生オリエンテーション

平成３年４月９日、清水記念体育館で平成３年度入学者2,000余名を対象に図書館利用ガイドのスライドが上映されました。これは図書館の作成したシナリオに、プロによるナレーション及びバックミュージックを入れたＡＶインフォメーション方式のオリエンテーション番組です。居眠りをする人も見当たらず、好評のうちに上映を終了しました。

'91図書館ガイダンス

平成３年度の図書館ガイダンスは、４月に新入生向けを、５月に上級生向けを１カ月間行い、全体で約334名の参加がありました。今回は特に、人文科学系、社会科学系、自然科学系ともに研究室や学科、講義単位で教官の方々も一緒に参加されたことで、大変有意義なものになりました。

メニューは、オンライン目録及びカード目録による岡大蔵書の探し方、冊子体二次資料及びニューメディアのCD-ROMやオンライン情報検索を用いた文献調査の方法、それに文献の所在調査と学外からの資料の取り寄せ方などで、テキストを準備し、実地に指導を行いました。

図書館では、本館・分館ともに現在カード目録を中止凍結し、オンライン目録に移行しています。またニューメディアの普及にはめざましいものがあります。一人でも多くの方に文献探索法をマスターしていただく必要性を感じました。なお、当館では今年度から目録データの遡及入力にも取り組んでいます。

水曜日の開館時間延長

平成３年４月より休暇中を除き、当面１年間、毎週水曜日の開館時間を午後10時まで延長することになりました。

これは利用者の方々の強い要望によるもので、この日は午後９時30分まで書庫の利用も可能です。４月の施行以来、利用者には大変好評のようです。

参議院文教委員が視察

平成３年10月30日、参議院文教委員会の田沢智治委員ら委員４人が附属図書館を視察されました。一行は萬成館長から図書館の概略について説明を受け、「信長記」(国指定重文)など池田家文庫史料を見学のあと、現在進行中の池田家文庫藩政史料マイクロ化事業の現場を訪れました。そして古文書の保存の重要性と自動検索機能を有するマイクロ化に強い関心を示され、熱心に質問を寄せられました。

岡山大学附属図書館概要1991発行

『岡山大学附属図書館概要1991』が平成３年７月に発行され、学内外に配布されました。図書館整備・充実計画表や、マイクロ化を中心とした資料の保存と対策、利用サービスをはじめ各種統計など、業務の指針となる最新データが盛りこまれています。

また、４月には『中央図書館利用の手引き教官用』が発行されました。サービス部門の内容が改訂されています。よくご覧のうえ、利用してください。

池田家文庫マイクロ化事業
―完成発表会と展示会―

池田家文庫藩政史料のマイクロ化事業については、かねてから『楷』や『コンバーションセンター通信』等によりお知らせしてきましたが、この度、その計画の第１期分が完成し、11月13日㈬市内のホテルで記者会見が行われ、発表されました。

当日の記者会見には、本学からは萬成勲附属図書館長、中野美智子参考調査係長、丸善株式会社からは関根隼治取締役、富士写真フイルム株式会社からは谷口吉光所長等が出席し、成果品等の披露も行われました。

今回完成した第１期分は総記、国事維新、法制行政といった分野で、16mmフィルムで488本、それに関連する史料目録とからなっています。

また、今回の第１期分の完成を記念して、岡山シンフォニービル地下１階ギャラリーにおいて11月14日㈭から18日㈪まで展示会が開かれました。展示会には、今回完成した成果品のほかにマイクロ化事業の概要やその作業工程が写真やパネルを用いて展示されました。また、池田家文庫の現物の貴重な史料も展示され、開催期間中多くの見学者で賑いました。附属図書館では、今後この成果品により、ユーザからの要望に応えることになっています。

OPACマニュアル完成

昨年11月より公開されたOPAC（図書館および総合情報処理センターが提供する図書・雑誌情報データベースのオンライン検索サービス）のマニュアルが完成し、７月、全学の教授の方々に配布いたしました。

OPACはMUSCAT（マスカット：平成元年度以降受入図書）とPEACH（ピーチ：全学に所蔵の雑誌）の２つのデータベースで構成されています。これにより、学内ＬＡＮを通じて、オンライン検索で全学の研究室から図書および雑誌の所蔵が検索できるようになりました。

マニュアルに関するご意見、ご感想がありましたら、どしどしお寄せください。

資生研分館もカードレス

資源生物科学研究所分館でも、目録業務の電算化に着手していましたが、端末の増設に伴い、平成３年度受入分より、カードレス体制に移行しました。カード目録の作成・編成は、件名目録以外は平成２年度までで中止凍結します。利用者は、閲覧室に設置した端末で、OPAC（オンライン目録）による検索ができます。なお、NACSIS－IR を使った情報検索のサービスも始めましたのでご利用ください。

会議

◆ 学 外

4.17～4.18　中国四国地区大学図書館協議会総会（於岡山大学）

4.18　国立大学図書館協議会中国四国地区協議会（於岡山大学）
- 第38回国立大学図書館協議会総会での分科会に中国四国地区として提出する協議題について
- 週40時間勤務制の実施に伴う大学図書館の在り方について
- 土曜開庁方式（学校週６日制）、完全土曜閉庁方式（学校週５日制）により週40時間勤務制が導入された場合の対応について

5.27　国立大学附属図書館事務部課長会議（於東京医科歯科大学）

6.27～6.28　第38回国立大学図書館協議会総会（於富山大学）
- 北陸先端科学技術大学院大学の加盟について
- 週40時間勤務制への対応について
- 資料の保存について

・ＩＬＬシステムの開発状況について

10.8～10.9　国立大学図書館協議会中国四国地区協議会係長会（於徳島大学）

10.29～10.31　第32回中国四国地区大学図書館研究集会（於鳥取大学）

学　内

5．9　平成３年度第１回図書資料(大型コレクション)収書計画に関する小委員会

5.15　平成３年度第２回図書資料(大型コレクション)収書計画に関する小委員会

5.30　第１回附属図書館資料選択委員会

・図書館資料の選択について

6．5　第１回附属図書館広報委員会

・平成３年度の活動方針について

・館報「楷」No14の編集について

6.13　第１回附属図書館運営委員会

・附属図書館各種小委員会の所属について

・平成３年度図書館資料購入費配当予算額(案)について

7．9　図書館データベースに関する総合情報処理センター長・附属図書館長協議会

・OPAC について

7.25　第２回附属図書館資料選択委員会

・図書館資料の選択について

9．3　第１回池田家文庫藩政史料マイクロ化実務打合わせ会

・目録照合整理作業について

・第１期完成記念展示発表会について

9.30　平成３年度特別図書選定小委員会

平成３年度附属図書館中央館備付「全学共用図書」（人文・社会科学系）選定小委員会

平成３年度附属図書館中央館備付「全学共用図書」（自然科学系）選定小委員会

10.16　池田家文庫等特殊文庫委員会

10.17　第３回附属図書館資料選択委員会

・図書館資料の選択について

研修

・平成３年度国立学校等幹部職員研修(課長級)

参加者　山中康行（5.14～5.17）

・平成３年度事務系職員初任者研修

参加者　桐村洋行（5.14～5.17）

・平成３年度大学図書館職員長期研修

参加者　藤井健司（7.15～8.2）

・平成３年度国立学校事務電算化講習会

参加者　渡邊正人（7.31～8.2）

・平成３年度図書館等職員著作権実務講習会

参加者　11名　（8.28～8.30）

・BIOSIS医学専門セッション

参加者　小林雅代（9.2～9.3）

・第11回 JST（基本コース）研修

参加者　堤　典子（10.28～10.31）

編集委から

窓の外を荒れ狂った台風19号も「資料保存と利用のエポック」池田家文庫マイクロ化事業を邪魔することもできず、11月13日には第１期分頒布の発表会をいたしました。まずは順調な進行を喜びたいと思います。

「仕方なしに、大きな箱入りの札目録を、ごごんで一枚々々調べて行くと、いくら捲ってもあとからあとから新しい本の名が出て来る　仕舞いに肩が痛くなった」（夏目漱石著・三四郎）。明治のかなたから続いていたカード目録も、OPAC にかわりつつあります。使い勝手・効率等を考え、配慮のある行き届いたサービスを今後も追求していくつもりです。

（山中）

岡山大学附属図書館報「楷」　No.14　平成３年11月25日
発行人　岩元忠幸　広報委員会　委員長　山中　委員　守屋、中野、小林、三棹、川上、上廻、水田、青井
岡山大学附属図書館発行　〒700　岡山市津島中３丁目１－１　電話0862-52-1111